

資料

あんのん
安 穩

戦争は遠い国の出来事と思うでしょう

しかし今も 世界のどこかで

むこ
無辜の人々が

いのちを奪われ き き ひん 危機に瀕していることに

気づいてください

無辜一罪のない

—2015 教箋 標語より—

当日会場配布

くりといたします。

.....
私たちは、どこまで相手の立場にたって膝をおることができるでしょうか。

そのためには多くの時間と人間の良心を尽くすことが必要でしょう。

アジアで、世界中で、多くの「優しい心を尽くせる人」を増やしていきましょう。

How far can we go to reach out to these people? I know it takes a lot of time and effort, necessary patience and understanding and most importantly the heart to do so. In Asia, even all over the world, let' s spread and increase the spirit of kindness we have for everyone.

日本には、「世界全体が幸せにならなければ、個人の幸福はありえない」との先人の言葉があります。

この信念を、アジアNGOs人道援助連盟日本執行本部の精神としたい。

In Japan, our ancestors taught us that the goal to happiness is not by fulfilling one self but by filling in the happiness of others. It is in the same way that happiness is only real when shared. I want this spirit of love for others to be the basic foundation of this organization.

ご静聴感謝します。

Thank you for your valued time and attention.

ていきたい」と、大勢の人びとに支えられ今日を迎えました。みんなの笑顔が見たい。お互いに気がついたら20歳年を重ねたことに改めて気づいた。

今年は1・17市民追悼のつどいでは、「震災の年に生まれた子」20歳のメッセージをお願いしました。若い元気な声が会場に響きます。

「人道支援組織」への展開

その後発生した、東日本大震災では、史上類を見ない広域で甚大な被害を前に、私たち日本の支援関係者は、海外での国際的に行われる災害支援において、今回、災害当事国「当事者」としての対応に直面した。これまでは世界各地における紛争や災害に際して、特に日本政府やNGOが積極的な人道支援の関与を行ってきた。

しかし、今回、東日本では、これまでのケースとは反対に、国際的支援の受け入れ側として、自国の社会制度や習慣の中で、海外からの数多くの担い手による多様な支援を被災者に「つなぐ」役割を担うことになり、私にとっては新たな挑戦であり、今後の支援活動を展開する上で重要な鍵となりました。

私はアジア諸国から「各国政府の関与を受けない、純粹に個人と非政府組織でつくり上げる組織」をめざし「国境・民族・政治・宗教を越えて救助や連携を行い、互いに貴重な経験やノウハウを分かち合う人類の平和のために援助と連携の場を作れないだろうか」と、アジアNGOs人道援助連盟に加盟することを求められた。

こうして、これまでの経験を活かし、アジアにおいて進んでいる「人道支援組織」への大きな慈悲への展開に取り組むことになりました。

最後に、先の「2014亜細亜NGOs人道援助連盟発展国際会議」in Taipeiにおいて日本からのゲストスピーカーとして発表した最後の一文を紹介して、締めく

体験することができたが、日頃私たち僧侶は、多くの人々の無常に接し、本当に相手の心を見いだすことができたであろうか。今こそ、たとえ一滴の優しさでも、お互いの心の中に広がる仏の世界を作ることが必要であり、私たちの役目は、一人一人の心の内に「人間の尊厳」を見いだすことで、「変化の人」となり、その実践（手だて）が、法華経、お題目の世界を顕現するものと確信することができました。

今こそ、お互いに「皆共に仏道を求め、成就する」ことが、法華経お題目の信仰に生きるわれわれの最も尊い精神であるといえるのではないか。

私たちの使命は、「モノ・カネ」ではなく、慈悲心による実践により「対等な関係」になり、同じ目標にむかって今日を迎えることかできました。

しかし、20年の時の流れは、残念ながら「風化」をもたらしていた。

「神戸の人口の三分の一が震災を知らない世代」となった。

2010年、震災から15年目、少しでも風化をやわらげるためにと「神戸・希望の鐘」を铸造した。この鐘を撞くすべての人が、亡き人びとの冥福祈り、復興への希望を託した。

見慣れた街並みはすっかり再生されたが、被災者の多くは高齢化が進み、これから先も厳しい現実と向き合っていくことだろう。

震災によって、人生が変わった彼らは今後どこに希望を求めていくのだろうか。

年々増加する孤独死や自死は、未だに震災の影響といえるが、さらなる増加は絶対に避けなければならない。

「生き続けることの意味」を共に考え、心の支えのあり方を問い直す良い機会として、アースと「神戸」とのかかわりは、終わることはないでしょう。

私たちを信じ、共に祈りの場所を提供してくれる人々がいる限り……。

はじめて神戸に向かってから「自分のことより他人の幸せを願える人を増やし

被災現場は、社会全体が本心を失っていた。

互いに信頼、信じる手立てがない。

まず、言葉で何を言っても意味をなさない。何が必要なのか、

どうしてほしいのか聞き取るすべがない。

私たち外部の人間がまず、理解しなければならなかったことは、

被災した人々にとっては自分自身が生きること、生きつづけることよりも、

いかに失ったものが大きかったか。被害による「不幸」は決して元に戻らない現実。

多くのものを失った喪失感、心の傷はどうすればいいのか。

せつかく助かった命を自ら絶つ人、寒さに持病が悪化して亡くなる人、

一人寂しく息を引き取る人を目の当たりにして、同じ人間として「生きることの意味」を問う毎日でありました。

そして、「生きる・生き続けることへの無意味さ」を感じる人びとに、「生き続ける」ことの意味を共に考え、心の支えのあり方を模索しながら、現場で慣れないながらも悪戦苦闘の日々をおくっていました。

こうして法華経の教えに導かれ、弘教する立場の一人として、こうした状況の中で、同情や哀れみではなく、「真の救済」は、どこにあるのか問い続けた

今本地の娑婆世界は三災を離れ

四劫を出たる常住の浄土なり……

己心の三千具足三種の世間なり

まさに、惨状（地獄）の中にあっても、仏の世界を見出すことが最大事であった。

法華経の菩薩の実践は、死者のみならず、強いものや、弱いものでも、大きいものでも、小さなものでも、生きとし生けるものたちが幸せであるように、実践していくことを教えている。今思えば、到底体験することのできない、非日常を

はない。」とか、さまざまな意見を頂きました。

さらに、多くのお上人から「なぜ、袈裟をつけて、数珠を持たないのか。」と、問われたが、私自身、個人としての行動であり数珠・袈裟を持参したわけではない。

たとえ持ち合わせたとしても、現場ではそれまでの職業も肩書きもまったく意味をなさない状態でありました。前述のように、まず「個人として動いた。」そして、本化菩薩の一員としての自覚、仏弟子という信仰的支えを内面に秘め行動・実践することの使命を誇りと感じ、現場での活動の重要性を強く認識するものでありました。

次に救援される対象は共済ではない。

それは寺や知り合いではない。また仲間同士の救援ではない。

現場では、対象の区別もない。

お互いに職業も肩書きも意味をなさないことを肌で教えてくれました。

まさに現地では、被災者との会話は、

「何しに来たか」興奮し、ほぼ喧嘩状態。他人をまったく受け入れない。

受け入れる余裕がない。

外部からの多くは、支援の掛け声に駆り立てられ、気持ちにおされて、まさに被災地神戸になだれ込んだ状態でした。

私たちは、どれだけ被災した人々の気持ちを、こころを汲み取ることができたのだろうか。

悲惨な現実を前に、生きることの意味すら失い、生きることを否定しよう

する人々に、他人を受け入れられるだけの気持ちも余裕もなかった。

現場は常識の世界を超えていた。

時間の経過と共に、自分たちの至らなさを痛感し、自分自身の無力さに、野次馬的行動は完全に非日常の世界で否定されてしまいました。

在した。克服すべき、現実との闘いでもあり宗教的課題・解決にむけて取組みが盛んに行われました。

救援への動機としては……前提として心の中での自然な気持ち。

個人的・私的意識

誰もが、「何かできることがある。何かしなければ」いたたまれなさを感じはじめていました。だからこそ「とりあえず動いた」というのが正直な気持ちでした。

「野次馬的」出発は、「見たい、行って見たい」怖いもの見たさ。一人の人間として内面的気持ち—今までとは違う、見たことも経験したこともない非日常の世界を体験する。

私的救済意識—慈悲心があったのか。

常に出家者として己の中心においているつもりだったが、それ以上に気持ちが高揚していた。混乱の中にあって救済意識はあったのか。これは慈悲心だといえるものがあったのだろうか。そんな余裕はありませんでした。

出家者、信仰者として菩薩の思想を持ち合わせ、仏教的理念が確立されていたのかと問われると、先に述べたように個人として行動することが精一杯でした。

出家者としての自覚として、法華経には、

本化の菩薩の行動として「内に菩薩の行を秘し 外にこれ声聞なりと現ず 實には 仏土を浄む」と教えています。

つまり、本化の菩薩という意識があれば、体外的には行動の中から自然とにじみ出ると考えます。

当時、著名な方から「既成仏教が通俗的な支援に終始した」と、表現されたり、同じ宗門人からも「坊さんとしてすべきことか。」「住職が寺を出てすべきことで

人数分の茶碗に飯を盛り蠟燭を前に、私一人の読経でした。

2000年、七回忌を前に行政は追悼式を打ち切りを表明。多くの被災者の願いは「たとえ簡素でも、心のこもった追悼行事を継続したい」との意向により、「市民追悼式」として慰霊行事を引き継ぎ、今日まで「市民追悼のつどい」として「喪と復興」の両面を継続してきました。会場には例年多くの遺族、市民が参列され、仲間同士互いの健康を気づかう姿や、再会を喜びあう機会となっています。

2010年、震災から十五年を前にして、震災を風化させない願いをこめて鑄造された「神戸・希望の鐘」は、地震発生の時刻、その響きは神戸の夜明け前の街並みに響きわたります。

今日、関係者の多くが衰老にともない、施設入所、他界、栄養失調、孤独死など、社会問題として今後の課題も多く、二十年の歳月の重さを感じながら1・17を迎えました。「被害による不幸は決して元に戻らない現実」。震災から20年、風化は、現地の人々を世間から置き去り、自助努力だけが生きつづけられる証となった。自然の猛威は人間社会のすべてを奪い、格差、貧困を生む。すべての祈りを託され、迎えた20年目の神戸。

ボランティア元年

震災発生～実のべ130万人ともいわれた人たちが神戸に向かいました。

当時のボランティアズムの概念として、公共・福祉のために個人の自発的な協力。無償性・利他性とありました。

さらに社会的概念としては、既存の社会的システムや行政システムに依存しない機能、創造的な自由な発想であるとされていました。

突然の自然の猛威に、これほど多くの個人が被災者となることへの対応、日本社会の支援システムは存在しなかったのです。

かつて、敗戦後の混乱する社会では、まさに「総ボランティア状態」であり、お互い助け合うのが必須でした。当時は、外部から支援を広く呼びかけたり、受け入れる仕組みも必要性がなかったのである。日本全体に貧・病・争一全てが存

分で守らねばならない」教訓を改めて私たちに残されたような気がします。

遠くの国の出来事

日本から8500キロ離れた場所の出来事も、これからは当事者の立場にたって考える必要があります。一方、国内でも「簡単に他人の命を奪ってしまう」悲惨な事案が増えています。そして、その事実は日常化し、当たり前前の出来事として捉えてはいませんか。

本当は、決して見過ごしてはならないのでしょうか。

かつて日本は先進国の中でも、もっとも安全と言われた神話がいとも簡単に崩れた。身内、他人を問わず人間不信は現実の社会問題として計り知れない状況にあります。今や自分だけが安全な日々を過ごすことが困難になってきました。それだけ日常生活において、不安や危険度が増していることを認識しなければならぬのでしょうか。言い換えれば「他人の不幸の上の繁栄は、やがて自分自身にも影響が及ぶ、無関心や忘れることが危険を呼び込むことになるかもしれない。」ことを改めて考える必要があるのではないだろうか。

20年目の神戸「一救援者から慈悲行の実践」

今年は阪神・淡路大震災発生から二十年目の時を迎えた。戦後最悪な大惨事に多くの日本人が動き「ボランティア元年」と呼ばれた。確かな救援の動機や意識もなく、ただ突き動かされるように被災地に向かった。誰もが持っている「己の心の優しさ」の発露。見知らぬ土地での「死者の救済」から「生者への救済」の日々。生き残った人々と、生きるための困難を共に乗り越えた信頼の絆は、さまざまな宗教をこえ神戸の皆様から一救援者の我が身に託された鎮魂の場へと。二十年の歳月の重さを感じながら迎えた「市民追悼の日」。

1月17日は、神戸の人々にとって決して忘れられない特別な日です。仮設住宅ふれあいセンターで行われた最初の慰霊は、黒板に亡くなった仲間の名前を書き、

「最後の授業」となった講義後、山本さんはメッセージをつづり学生に配った。

「学生へのメッセージ」要旨

日本で暮らす私たちにとって戦争は遠い国の出来事と思うでしょう。

しかし、世界のどこかで無辜（むこ）の市民が命を落とし、経済的なことも含め危機に瀕している。その存在を知れば知るほど、どうしたら彼らの苦しみを軽減することができるのか、何か解決策はないだろうかと考えます。

戦争の現場で何が起きているのか伝えることで、その国の状況が、世界が少しでも良くなればいい。報道することで社会を変えることができる。私はそれを信じています。

山本美香

想定外のできごと

「シリア・邦人記者死亡」

山本美香—2012年（平成24年）8月20日、シリア内戦の取材中、シリア北部のアレッポにてシリア政府軍（シャッビーハ）の砲撃を受けて、搬送先の病院で死亡したことを反アサド政権「自由シリア軍」のスポークスマンが発表。日本の外務省もこの事実を確認した。山本の家族へは21日の9時頃に、佐藤和孝氏の電話連絡で伝えられた。銃撃後に病院に運ばれ、パートナーの佐藤が確認したところ、右腕および首に銃創痕が、防弾チョッキで保護された腹部にも、銃撃の跡があり、大量の出血があった。45歳没。

山梨県都留市出身 ジャパンプレス所属 フリージャーナリスト

過激派による凄惨なテロ事件は世界各地で頻発しています。ツアー旅行中に事件に巻き込まれ殺害されるなど、海外における邦人の死はとても衝撃的でした。

中でも日本中の人びとが「後藤健二さん」の安否や無事に開放されることを祈る思いで見守っていた。どちらも危険を伴う紛争地域での活動に「自分の命は自

20年目の神戸「一救援者から慈悲行の実践」

石原 顕正

今回の発表の8か月前、私は、新年発行の教箋カレンダー標語の編集に追われていました。お手元に資料として配布した「教箋標語」の1Pは、2012年、シリア国内で取材中に殺害された日本人フリージャーナリスト山本美香さんの「学生へのメッセージ」の一語を標語として使わせていただき、広く世間の人びとに彼女の思いを伝え、この言葉の意味を考えてみたいと願いました。

まさに、この時期にフリージャーナリスト後藤健二さんが拘束の後、殺害され、個人と国の危機管理を問われる事態が発生しました。

生前、山本さんは早稲田大学大学院での授業を担当（ジャーナリズム論）ジャーナリストを目指す学生へ、イラク戦争など危険な紛争地帯での取材について語っていた。

山本さんは学生に「戦争ですぐそばにいた人が攻撃を受けて大けがを負った。記者として取材を続けるか。助けるか。皆さんならどうするか」と問いかけ、学生の意見を聞いた後こう語った。

「どちらを選んだとしても、後で悩むことになるだろう。自分は助けたが、どちらが正解ではない。その場で真剣に考え、伝えるとはどういうことなのか悩むのが、ジャーナリズムだ」と。

「戦火の町で苦しむ市民の姿。外には届かない声を伝えたい。生命の危険にさらされながらも逆境の中で笑ったり、生き延びようとする姿を捉えたい。」

- するからである。《『日蓮宗宗定法要式』、『祈祷指南書』、『法華験家訓蒙』》
- 3 平成17年度第初行、平成23年度第再行。
 - 4 (修士論文参考文献) に、本研究の際に参照した鈴木教授の研究業績を載せた。
 - 5 一生のあいだの重要な節目に受けるべき一連の社会的・宗教的儀式であり、生誕式・結婚式・葬式などが含まれている。(早島 [1987] 146-147を参照した)
 - 6 鈴木 [2005a] を参照した。
 - 7 佐々木 [2005] を参照した。
 - 8 水野・中村 [1989] 82-84を参照した。
 - 9 現在は三者を使って研究を進めている。
 - 10 SAT大正新脩大藏經テキストデータベース (<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>) を使用した。
 - 11 江島 [1985-1993] に依拠した。
 - 12 中村 [1975] 1258-1259を参照した。
 - 13 に言う、話す、告げる、知らせる、記述する、名づける、呼ぶ、叱る(鈴木学術財団 [2006] 1164)
 - 14 (veda聖典の) 学習、(veda聖典を) 声高に暗誦すること(鈴木学術財団 [2006] 1542-1543)
 - 15 朗誦する、朗読する、(自ら) 復誦する、学ぶ、読む、(書物の中で) 提議する・述べる・引用する、称する、宣言する(鈴木学術財団 [2006] 725-726)
 - 16 共に歌う、合唱する(鈴木学術財団 [2006] 435)
 - 17 指示す、示す、提出す、配分す、授く、成就す、導く、命令す(鈴木学術財団 [2006] 582)
 - 18 光る、輝く、心に浮かぶ、明らかになる、理解される(鈴木学術財団 [2006] 958)
 - 19 見ゆ、現る、輝く、照す(鈴木学術財団 [2006] 346)
 - 20 把持する、支える、になう、着用する、……に執する、すがりつく、保持する、身につける、滞留する(鈴木学術財団 [2006] 647)
 - 21 搔く、こする、溝を造る、(地面を) 裂く、(線を) 引く、描写する、画く、写生する、掘る、書く、記す(鈴木学術財団 [2006] 1150)
 - 22 「〈受〉とは受領、〈持〉は憶持の意。〈受け持つ〉と訓読し、教えを受けて記憶すること」(中村・福永・田村・今野・末木 [2002] 500)

- [2009b] Dam pa'i chos pad ma dkar po (III), dPa'i le'u (Saddharmapuṇḍarīka (III), Aupamyaparivarta): Romanized Transliteration from the Phug drag Manuscript Kanjur, *Bulletin of the Graduate Schools (Yamaguchi Prefectural University)* 10, pp. 77-101.
- [2009c] Dam pa'i chos pad ma dkar po (IV), Mos pa'i le'u (Saddharmapuṇḍarīka (IV), Adhimuktiparivarta): Romanized Transliteration from the Phug drag Manuscript Kanjur, *Bulletin of the Faculty of Intercultural Studies (Yamaguchi Prefectural University)* 15, pp. 83-94.
- [2010a] Linking the Buddha's Attainment of Supreme Enlightenment to the Welfare of Beings in the *Suvarṇaprabhāsa*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 121 (58-3), pp. 62-70.
- [2010b] Dam pa'i chos pad ma dkar po (V), sMan gyi le'u (Saddharmapuṇḍarīka (V), Oṣadhīparivarta): Romanized Transliteration from the Phug drag Manuscript Kanjur, *Bulletin of the Faculty of Intercultural Studies (Yamaguchi Prefectural University)* 16, pp. 81-93.

〈注〉

- 1 中村・福永・田村・今野・末木 [2002] 400を参照した。
- 2 誦經の功德 「誦經の利甚だ大いなり諸經に皆云く無量の珍宝を以て布施するも誦經一偈の功に及ばずと」『草山要路』第七章にあるように、仏教各派すべて誦經を信行形式の第一とする。これは經典は即ち釈尊の真言であり、読誦し聴聞することは釈尊と同座することと観ずるからである。日蓮聖人が法華經を昼夜に読誦され、その功德を顕示した文章は数多く、滅後の教団でも法華經読誦は重要な課題であった。在家には唱題を勧め、僧侶は法華經読誦の卷数によって功德の増大を期した。千部会とか万卷陀羅尼などの読誦法が今に伝わっている。修法道の先師も卷数読誦を重んじ、古伝書には、至る所に歴大な誦經を求めている。加行所清規にも、毎日の読誦卷数を定めてあり、経力により加行の成弁を祈ると共に、修法の現証は経力によって顕れると

- Journal of Indian and Buddhist Studies* 102, pp. 32-36.
- [2004] Rites and Buddhism A Perspective from the *Sarasvāi-parivarta* in the *Suvarṇaprabhāsa*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 104, pp. 12-17.
- [2005] The Unchanged Intention of the Compilers of the *Suvarṇaprabhāsa*: An Examination through the Verification of the Hypothesis on “the Independence of [Mahāyāna] Buddhism,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 106, pp. 20-26.
- [2006] The Primary Introduction of the Rites for Good Fortune into the *Suvarṇaprabhāsa* Described in the *Śrī-parivarta*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 109 (54-3), pp. 42-50.
- [2007] An Intention of the Compilers of the *Suvarṇaprabhāsa* Expressed and Intimated in the *Dr̥ḍhā-parivarta*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 112 (55-3), pp. 64-72.
- [2008a] The Characteristics of “the Five Chapters on the Various Gods and Goddesses” in the *Suvarṇaprabhāsa*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 115 (56-3), pp. 66-73.
- [2008b] Dam pa'i chos pad ma dkar po (I), Glen gzi'i le'u (Saddharmapuṇḍarīka (I), Nidānaparivarta): Romanized Transliteration from the Phug drag Manuscript Kanjur, *Bulletin of the Faculty of Intercultural Studies (Yamaguchi Prefectural University)* 14, pp. 109-125.
- [2008c] Dam pa'i chos pad ma dkar po (II), Thabs la mkhas pa'i le'u (Saddharmapuṇḍarīka (II), Upāyakaūśalyaparivarta): Romanized Transliteration from the Phug drag Manuscript Kanjur, *Bulletin of the Graduate Schools (Yamaguchi Prefectural University)* 9, pp. 51-71.
- [2009a] The Attainment of Supreme Enlightenment through the Offerings Represented in the *Suvarṇaprabhāsa*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 118 (57-3), pp. 78-86.

- 中村 元・福永光司・田村芳郎・今野 達・末木文美士
 [2002] 『岩波仏教辞典 第二版』(編集), 東京: 岩波書店.
- 日蓮宗 [1989] 『宗定法要式』, 東京: 日蓮宗新聞社.
- 日蓮宗事典刊行委員会
 [1981] 『日蓮宗事典』, 東京: 日蓮宗宗務院.
- 早島鏡正 [1987] 『仏教・インド思想辞典』(監修), 東京: 春秋社.
- 早島鏡正・高崎直道・原 実・前田専学
 [1982] 『インド思想史』, 東京: 東京大学出版会.
- 松壽誠廉・長尾雅人・丹治昭義
 [2001] 『大乘仏典 4 法華経 I』, 東京: 中央公論新社.
 [2002] 『大乘仏典 5 法華経 II』, 東京: 中央公論新社.
- 松村壽巖 [2001] 『日蓮宗儀礼史の研究』, 京都: 平楽寺書店.
- 水野弘元 [2002] 『パーリ語文法』, 東京: 山喜房佛書林.
 [2004] 『経典はいかに伝わったか 成立と流伝の歴史』, 東京: 佼成出版社.
 [2005] 『増補改訂パーリ語辞典』, 東京: 春秋社.
- 水野弘元・中村 元
 [1989] 『仏典解題事典』(編集), 東京: 春秋社.
- Suzuki, T. [1996] The *Mahāmeghasūtra* as an Origin of an Interpolated Part of the Present *Suvarṇaprabhāsa*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 89, pp. 28-30.
- [1999] Mutual Influence among the *Mahāyāna Sūtras* concerning *Sarvalokapriyadarśana*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 94, pp. 10-14.
- [2001] The Recompilation of the *Mahāparinirvāṇasūtra* under the Influence of the *Mahāmeghasūtra*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 98, pp. 34-38.
- [2002] The Buddhology in the *Mahābherīsūtra* Inherited from the *Saddharmapuṇḍarīka*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 100, pp. 20-24.
- [2003] *Stūpa* Worship and *Dharma* Evaluation in the *Suvarṇaprabhāsa*,

- [2005b] 教義と儀礼を通して見るインド大乘仏教の姿—金光明經大弁才天女品からの視点—, 『中外日報』 26701 (平成17年 2月 1日号), 6・7面.
- [2006a] Tatāgato Veditavyaḥ—如来であると知りなさい—, 『法華經と大乘經典の研究』, 東京: 山喜房佛書林, 185-208.
- [2006b] 釈尊の遺言—その現代的メッセージを読み解く—, 『山口県立大学大学院論集』 7, 18.
- [2006c] 道徳と宗教—人はなぜ施しをするのか—, 『山口県立大学社会福祉学部紀要』 12, 9-36.
- [2006d] 仏教史の謎を巡って—サンスカーラとの共存の可能性と実現性—, 『山口県立大学国際文化学部紀要』 12, 25-35.
- [2007a] 如来の出現と衆生利益を巡る思想史—特に如来藏系經典に焦点を当てて—, 『東洋文化研究所紀要』 152, 289-324.
- [2007b] 如来藏思想と慈悲, 『日本仏教学会年報』 72, 141-152.
- [2007c] 大乘經典—仏教における〈教え〉とは何か—, 『山口県立大学大学院論集』 8, 1-15.
- [2008] 2008年度仏教文化A講義ノート.
- [2009] 仏塔信仰の脈絡より辿る『法華經』と如来藏・仏性思想の關係, 『日蓮仏教研究』 3, 5-27.
- [2010] 起塔を通じた永遠の釈尊の感得—『法華經』のブツダ観—, 『宗教研究』 363 (83-4) (第六十八回学術大会紀要特集), 373-374.

塚本啓祥・多田孝正・池田魯参

- [2009a] 『傍訳 法華三部經全書 第一卷』, 東京: 四季社.
- [2009b] 『傍訳 法華三部經全書 第二卷』, 東京: 四季社.
- [2009c] 『傍訳 法華三部經全書 第三卷』, 東京: 四季社.
- [2009d] 『傍訳 法華三部經全書 第四卷』, 東京: 四季社.
- [2010e] 『傍訳 法華三部經全書 第五卷』, 東京: 四季社.
- [2010f] 『傍訳 法華三部經全書 第六卷』, 東京: 四季社.

辻直四郎 [1974] 『サンスクリット文法』, 東京: 岩波書店.

中村 元 [1975] 『仏教語大事典 下巻』, 東京: 東京書籍株式会社.

- 鈴木隆泰 [1996] 『大法鼓経』の研究序説—構成、及び経題に関して—、『仏教文化』35 (学術増刊号 9), 2-22.
- [1997] 如来常住経としての『大法鼓経』, 『仏教文化研究論集』1, 39-55.
- [1998a] 大乘經典編纂過程に見られるコンテクストの移動—(如来の遺骨に関する対論)を巡って—, 『東洋文化研究所紀要』136, 227-253.
- [1998b] 『大雲経』の目指したもの, 『インド哲学仏教学研究』5, 31-43.
- [1998c] 『金光明経 如来寿量品』と『大雲経』, 『東洋文化研究所紀要』135, 1-48.
- [1999a] 央掘魔羅経に見る仏典解釈法の適用, 『印度学仏教学研究』95, 133-137.
- [1999b] 金光明経如来寿量品の発展過程より見た如来の寿命と遺骨, 『東洋文化研究所紀要』138, 195-219.
- [2000a] 安慰説者—央掘魔羅経と大法鼓経のトレーガー—, 『東洋文化研究所紀要』140, 143-167.
- [2000b] 法華経見宝塔品の考察—stūpaからdharmaへ—, 『江島恵教博士追悼論集 空と实在』, 東京:春秋社, 383-397.
- [2000c] 如来藏系經典の宗教倫理構造, 『日本仏教学会年報』65, 77-91. (『仏教における善と悪』, 日本仏教学会編, 京都:平楽寺書店, 77-91再所収)
- [2000d] 涅槃経系經典群における空と实在, 『東洋文化研究所紀要』139, 109-146.
- [2001] 異訳対照に基づくインド大乘經典史解説の一例, 『東洋文化研究所紀要』141, 147-166.
- [2003a] 『大雲経』の構造, 『仏教文化研究論集』7, 3-22.
- [2003b] 大雲経における断肉説, 『山口県立大学国際文化学部紀要』9, 1-8.
- [2004a] 仏教と差別—前世の業の報いはあるのか—, 『山口県立大学社会福祉学部紀要』10, 89-99.
- [2004b] 「諸行無常」再考, 『山口県立大学国際文化学部紀要』10, 21-31.
- [2005a] 日本仏教は「葬式仏教」か—現代日本仏教を問い直す—, 『山口県立大学国際文化学部紀要』11, 31-44.

SPC2 Second Chinese Version of the SP, T. No. 262. (『妙法蓮華經』七卷、鳩摩羅什
訳)

T. Taisho Shinshu Tripiṭaka.

(修士論文参考文献)

- 植木雅俊 [2008a] 『梵漢和対照・現代語訳 法華経 上』, 東京: 岩波書店.
[2008b] 『梵漢和対照・現代語訳 法華経 下』, 東京: 岩波書店.
- 江島恵教 [1985] 『法華経原典総索引 第Ⅰ分冊』, 東京: 霊友会.
[1986] 『法華経原典総索引 第Ⅱ分冊』, 東京: 霊友会.
[1987] 『法華経原典総索引 第Ⅲ分冊』, 東京: 霊友会.
[1988a] 『法華経原典総索引 第Ⅳ分冊』, 東京: 霊友会.
[1988b] 『法華経原典総索引 第Ⅴ分冊』, 東京: 霊友会.
[1989] 『法華経原典総索引 第Ⅵ分冊』, 東京: 霊友会.
[1990a] 『法華経原典総索引 第Ⅶ分冊』, 東京: 霊友会.
[1990b] 『法華経原典総索引 第Ⅷ分冊』, 東京: 霊友会.
[1991] 『法華経原典総索引 第Ⅸ分冊』, 東京: 霊友会.
[1992] 『法華経原典総索引 第Ⅹ分冊』, 東京: 霊友会.
[1993] 『法華経原典総索引 第Ⅺ分冊』, 東京: 霊友会.
- 三枝充恵 [1974a] 『法華経現代語訳 (上)』, 東京: 第三文明社.
[1974b] 『法華経現代語訳 (中)』, 東京: 第三文明社.
[1974c] 『法華経現代語訳 (下)』, 東京: 第三文明社.
- 坂本幸男・岩本裕
[1991a] 『法華経 (上)』, 東京: 岩波書店.
[1991b] 『法華経 (中)』, 東京: 岩波書店.
- 坂本幸男・岩本裕
[1991] 『法華経 (下)』, 東京: 岩波書店.
- 佐々木閑 [2005] 『出家とはなにか』, 東京: 大蔵出版株式会社.
- 菅沼 晃 [1994] 『新・サンスクリットの基礎』, 東京: 平河出版社.
- 鈴木学術財団
[2006] 『漢訳対照梵和辞典 新装版』, 東京: 講談社.

7、結論

『法華經』は、自らが「受持」「読」「誦」「解説」「書写」されることを求めている。しかし、これらの諸行為が行われることは、『法華經』にとっての目的ではなかった。『法華經』は自らが自己増殖し、流布されることを求めており、そのための手段としてこれらの諸行為は存在していた。『法華經』が、自らの豊富で多種多様な功德を説いているのも、これらの諸行為へと導くための手段であった。

ここから、『法華經』に帰依する者は、『法華經』の目指す目的達成 (= 『法華經』の流布) のために尽力しなければならないことが分かる。人々のあり方は千差万別であるからこそ、人に応じた説き方が求められる。巧みに、善く説くことで、まずは人々を『法華經』に導き、そして「受持」「読」「誦」「解説」「書写」させる。これにより、人々は利益を受け、『法華經』は流布するという目的を達成できると考えられる。『法華經』は“『法華經』に導く者”の存在を大変重要視している。『法華經』の目的達成 (= 『法華經』の流布) のために仕事をする者は、常に守護されると強調されており、このことを心の支えとして、精進することが求められているのである。

最後に、なぜ『法華經』が流布されるべき經典であるのかという疑問については、修士論文としての本研究の範囲を超えており、十分な考察ができておらず、今後の課題となっている。しかし、「『法華經』は新たな教説を示す經典というよりも、むしろ〈本来の仏教の姿〉を再提示している經典である」という鈴木教授の最新の研究がその方向を示していよう。その成果を踏まえつつ、新たに『チベット訳法華經』も参照しながら、引き続き研究を進めていきたい。

〈略号および使用テキスト〉

SP *Saddharmapuṇḍarīka*. (『法華經』)

SPS *Saddharmapuṇḍarīka*, ed. H. Kern and B. Nanjio, St. Petersburg, 1908–1912.

とである。多くの資料の中で「仏陀・如来・菩薩が受持者を守護する」、「仏陀・如来と同様に供養すべきだ」と説かれていたことから『法華経』が受持者を大変重要視していることがわかる。その受持者について考えれば、経典の文句は記憶しているが内容は理解していない者と経典の文句も内容も理解している者では優劣が存在している。前者は、読誦は行っても解説は不可能である。後者は、読誦・解説ともに行なうことができる受持者であり、『法華経』にとってより多くのメリットがあるのは後者の受持者である。

これと関連して本研究の資料から見えてきたことは、読誦という全ての動詞の中で、仏陀・如来を主語に持つものは存在していないことである。では解説はどうだろうか。解説という動詞には仏陀・如来を主語に持つものが確認された。ここからも、解説がより充実した受持者が行う行為であることがわかる。

このように述べていくと「受持」が特別な存在であるかのように思えてくる。本研究における資料の中でのみという限られた範囲ではあるが、受持について調べてみた。すると受持が漏れている資料が8つ確認された。網羅的に見ていけばさらに多くの資料が確認できるであろう。受持とは『法華経』にとって自らを弘めるために、より有効な手段ではあるが、受持もまた手段の一つに過ぎないことが分かる。

●書写について

書写された経典は、経典を文字にして受持するものともいえる。そのため、書写された経典は、受持と肩を並べる存在である。さらに書写の方が、多くのメリットがある。書物と人の記憶を比べてみた時に、ある内容を、より長い時間にわたって、より正確に、より広範囲に伝達しようとすれば、書物の方が利点は多い。そこから、書写は『法華経』にとって重要な存在であるといえる。しかし同様に調べてみると、5つの資料において書写が漏れていることが確認できた。書写もまた、手段の一つに過ぎないのである。

することで功德が生まれ、読経する量が増えれば増えるほどその功德は増大する」という発表者の認識が合わさり、読経は特化すべき行為であると発表者は考えていた。

ここでSPC2・SPSの対応を見ていきたい。これらの対応をみると、読誦という行為は容易に受持・解説・書写・聴聞といった行為に変わっている。その様な資料は、工程A85の資料のうち44の資料が確認され、これは全体の51%にあたる。工程B61の資料のうち23の資料で確認され、これは全体の37%にあたる。これらの資料から読誦という行為は、『法華経』の中で他を凌ぐ特別な行為として存在しているわけではなく、それら諸行為の中の一つに過ぎないことがわかった。

●受持・読誦・解説・書写・聴聞の関係

『法華経』に対する諸行為について、もう少し考えてみたい。まず受持とは、経典を記憶し、把握することである²²。次に読誦・解説・書写について考えると、これらの行為は経典を保持していなければ行なえない行為である。経典を頭の中に記憶している、もしくは文字となったものを保有していることにより、読誦・解説・書写といった行為は初めて行うことができる。換言すれば、受持している者にのみ行なえる行為だといえる。聴聞に関しては聴聞者が受持していなくとも、受持者に説いてもらうことで可能となる行為である。受持している者は読誦することが可能であり、書写することが可能であり、解説することが可能である。また、記憶する事を一般的に考えてみれば、ある内容を記憶する時、「声に出して読む」、「文字を書く」、「他者に説明する」といった行為が行なわれるだろう。そのように考えると、読誦・解説・書写・聴聞はより充実した受持へ導いてくれる行為であり、これらの諸行為は相互補完的に存在していることがわかる。

●受持について

『法華経』を弘めていく者に求められることは、より充実した受持者となるこ

考え出されたのが經典の書写、読誦、解説などの功德の強調であった。經典は書写するだけで絶大な功德があることを説くことで、經典を後世まで伝えていこうとしたのであると水野 [2004] 122-124は述べている。

本研究の序章では示したのだが、大乘經典は僧団の記憶を離れて誕生している。僧団の中で記憶により厳重に守られ伝承されてきた初期經典とは異なり、大乘經典は僧団の記憶に守られてはいない。そのために、書物となった大乘經典が抱える問題は、水野 [2004] 122-124が述べているように、いかにして伝承するかであった。そこで大乘經典は、受持、読誦、解説、書写されることを求め始める。なぜならば、これらの行為は、後世に伝承させるための手段となりえるからである。『法華經』もまた、全体の約87%の資料を要して『法華經』が勝れた經典であることを述べ、多くの功德を示すことで、それらの諸行為が行われることを求めているのである。

ここで「読誦することを誓願する資料」を見てみたい。この資料は、工程Aに6資料、工程Bに8資料が存在している。その内容は表現に差異があるとはいえ、「仏滅後に、この『法華經』を読誦することで『法華經』を弘めます」と述べている。これらの資料から分かることは、『法華經』の読誦は『法華經』を弘めるために行なう行為であり、これは水野 [2004] 122-124とも一致している。さらに「仏滅後に」という記述は各資料に存在し、『法華經』は仏滅後において弘めるべき經典であることが述べられている。

以上のことから、大乘經典である『法華經』にとって重要なことは伝承されることであり、『法華經』の読誦は『法華經』が弘まるための手段として行なわれることが判明した。

● 『法華經』と読誦の関係

では、『法華經』にとって読誦とは特別な存在なのであろうか。經典に対して行なう行為は、受持・解説・書写・聴聞といったように読誦以外にも存在している。前述したように、発表者にとって經典の読誦は特別な存在であった。「読経

の内容を見てみると、「世界平和」や「国の繁栄」という共同体として受ける功德を示した資料は存在しておらず、示されていたのは個人が受ける功德のみであった。その内容は仏教徒が求める最終目的である「正等覚を得る」をはじめとして、「諸仏・諸天に加護される」、「六根清浄」、「後生善処」などがある。個人が受ける功德としては多種多様であり、仏教徒でなくとも魅力を感じる功德が多数示されていることから『法華経』が仏教徒に限らず、広く門戸を開いていることがわかる。

さらに、『法華経』読誦者の持つべき心構えが示されている資料もあり、その内容をみてみれば、読誦者は、嫉妬・へつらい・あざむきの心を起こすことなく、心穏やかでなければならぬと示されている。このような心構えを示している資料も、『法華経』が勝れた経典であることを示す資料の一つであるといえる。なぜならば、高貴な存在を前にすれば、それ相応の心構えが必要になる。これと同様に『法華経』もまた高貴な存在であるために、読誦者にもそれなりの心構えを求めていると考えられるからである。『法華経』を聴く側の立場からすれば、『法華経』と『法華経』の読誦者に対する印象はオーバーラップし、読誦者の印象は少なからず『法華経』の印象に影響を与える。それゆえ聴聞者に対して『法華経』の優位性を確実に示すためにも読誦者を戒めているともいえる。

●なぜその主張が必要か

『法華経』が勝れた経典であることが述べられている資料の合計はSPC2とSPSを合わせて128が確認され、これは全体の約87%に当たる。これだけ多くの箇所において『法華経』が勝れた経典であり、読誦することを求めているのは何故だろうか。

水野 [2004] 122-124によると、初期経典ではまったく見られなかった経典書写などの功德は大乗経典において説かれるようになり、これは大乗経典の成立当初から見られ、そこには大乗経典が抱える問題が関係している。制作された大乗経典の抱える問題は、どのようにして広く伝承させるかであり、その結果として

5-2、工程Bの考察（資料数61）

B-①、SPSの文脈から行なう資料分け

- ・ B-①-1「読誦することで得られる功德の内容を説く資料」（資料数34）
- ・ B-①-2「読誦することで得られる功德の量を説く資料」（資料数9）
- ・ B-①-3「読誦することを誓願する資料」（資料数8）
- ・ B-①-4「様々な菩薩・比丘達が読誦していることを説く資料」（資料数8）
- ・ B-①-5「読誦をしなかった者たちの資料」（資料数1）
- ・ B-①-6「読誦者を誹謗する者の罪を説く資料」（資料数1）

B-②、工程Bの対応における考察

- B-②-1「SPSとSPC2が対応している資料」（資料数38）
- B-②-2「SPSとSPC2が対応していない資料」（資料数23）
 - ・ B-②-2-(イ)「SPSの読誦を含む文脈がSPC2には存在していない資料」（資料数10）
 - ・ B-②-2-(ロ)「SPSの読誦がSPC2では説で受けている資料」（資料数7）
 - ・ B-②-2-(ハ)「SPSの読誦がSPC2では受持で受けている資料」（資料数4）
 - ・ B-②-2-(ニ)「SPSの読誦がSPC2では聞で受けている資料」（資料数1）
 - ・ B-②-2-(ホ)「SPSの読誦がSPC2では書写で受けている資料」（資料数1）

6、小結

●優れた経典であることの主張

工程A・工程Bにおいて、『法華経』が読誦をどのように示しているのかわてきた。すると、最も多くの資料を用いて、『法華経』が勝れた経典であることが強く主張されており、優れた経典だからこそ様々な菩薩や比丘たちが読誦してきたのだと述べられていた。

『法華経』には多種多様な功德が示されているが、読誦によって得られる功德

- ・ A-①-2 「様々な菩薩・比丘たちも經典の読誦を行っていることを説く資料」(資料数7)
- ・ A-①-3 「読誦することで得られる功德が無量であることを説く資料」(資料数6)
- ・ A-①-4 「読誦することを誓願する資料」(資料数6)
- ・ A-①-5 「読誦者を誹謗する者の罪を説く資料」(資料数3)
- ・ A-①-6 「『法華經』は得難たいことを説く資料」(資料数3)
- ・ A-①-7 「読誦をしなかった者たちの資料」(資料数3)
- ・ A-①-8 「読誦者に対する心がまえを説く資料」(資料数2)

A-②、工程Aの対応における考察

● A-②-1、「SPC2とSPSが対応している資料」(資料数41)

- ・ A-②-1-(イ) 「 $\sqrt{\text{vac}}^{13}$ からなる資料」(資料数23)
- ・ A-②-1-(ロ) 「svādhyāya¹⁴という語幹でつくる資料」(資料数15)
- ・ A-②-1-(ハ) 「 $\sqrt{\text{paṭh}}^{15}$ からなる資料」(資料数2)
- ・ A-②-1-(ニ) 「saṃ- $\sqrt{\text{gai}}^{16}$ からなる資料」(資料数1)

● A-②-2、「SPC2とSPSが対応していない資料」(資料数44)

- ・ A-②-2-(ホ) 「SPC2の読誦という表現がSPSでは $\sqrt{\text{dis}}^{17}$ ・ $\sqrt{\text{bhāṣ}}^{18}$ ・saṃpra- $\sqrt{\text{kās}}^{19}$ からなる語句に変わっている資料」(資料数17)
- ・ A-②-2-(ヘ) 「SPC2の読誦という表現がSPSでは単純に抜け落ちている資料」(資料数13)
- ・ A-②-2-(ト) 「SPC2の読誦という表現がSPSでは $\sqrt{\text{dhr}}^{20}$ からなる語句に変わっている資料」(資料数12)
- ・ A-②-2-(チ) 「SPC2の読誦という表現がSPSでは $\sqrt{\text{likh}}^{21}$ からなる語句に変わっているグループ」(資料数2)

むことであり、その内容を第三者に伝えることを求めない¹²という定義のもとで分類したところ、「読誦という意味を含む資料」は61存在していることが分かった。

資料3は、工程Bにおける「読誦という意味を含む資料」の一つである。3行目の「svādhyāyaṃ」が、8行目の「読誦」に対応していることを示しており、それぞれの出典箇所と訳文を加えている。この作業を工程Bの「読誦という意味を含む資料」61箇所全てで行い、また「読誦という意味を含まない資料」1167箇所はその出典箇所を示した。これが工程Bの作業である。

資料3 工程Bの資料例

(B-38) svādhyāyaṃ 378.4 常不輕菩薩品	1
[SPS 378.3] anena mahāsthāmaprāpta paryāyeṇa sa bodhi-	2
[SPS 378.4] -sattvo mahāsattvo bhikṣubhūto noddeṣaṃ karoti na svādhyāyaṃ karoti/	3
このようにして、得大勢よ、その菩薩大士は、比丘でありながら、講説もせず、 読誦もしない。	5
読誦 50c21	6
[SPC2 50c20] 而是	7
[SPC2 50c21] 比丘，不專讀誦經典，但行禮拜。	8
しかもこの比丘は經典を讀誦することはなく、ただ礼拝のみを行っていた。	9

5、考察

5-1、工程Aの考察（資料数85）

A-①、SPC2の文脈から行なう資料分け

- ・ A-①-1 「読誦することで得られる功德の内容を説く資料」（資料数55）

資料2 工程Aの資料例

(A-36) 讀誦 41b5 從地涌出品	1
[SPC2 41b4] 此諸菩薩皆於是娑婆世	2
[SPC2 41b5] 界之下此界虛空中住, 於諸經典讀誦通利	3
[SPC2 41b6] 思惟分別正憶念.	4
これらの〔大地より涌出した〕多くの菩薩達は、すべて娑婆世界の下にあり、	5
この世界に属する虚空の中に住んでいるのである。彼等は多くの經典を讀誦し、	6
精通し、思惟し、分別して、正しく憶念した。	7
svādhyāya 309.9	8
[SPS 309.9] svādhyāyoddeśacintāyoniśomanasikārapravṛttā ete kulaputrā asaṅgaṇi-	9
[SPS 309.10] -kāramā asaṃsargābhiratā anikṣiptadhurā ārabdhavīryāḥ/	10
これらの良家の子は〔經典を〕讀誦し、解説し、思索し、根源的な思惟を専心	11
修行し、社交を楽しまず、交際をよるこぼず、重荷をおろさず、精進努力に	12
励んでいるものたちである。	13

4-2 工程Bについて

工程Aの資料85箇所を調べた所、「讀誦」に対応していたSPSの語源は5種類であることがわかった。「√ vacからなる語句」・「svādhyāyaという語幹でつくる語句」・「√ pathからなる語句」・「saṃ-√ gaiからなる語句」・「√ bhāṣからなる語句」の5種類である。さらに「讀誦」と関連をもつと思われる語源、「√ dhṛからなる語句」・「√ diśからなる語句」・「√ kāśからなる語句」・「√ vadからなる語句」の4種類を加えた合計9種類を調査対象とした。

これら9つの語源から派生する語句をSPSから全て抜粋すると¹¹、1228の語句が存在していた。しかし、この1228の語句には、SPSにおいて「讀誦という意味を含まない資料」も含まれている。そのため、「讀誦とは、經典を声に出して読

『妙法蓮華經』(鳩摩羅什訳)・『添品妙法蓮華經』(闍那崛多訳)の3種類であり、これら3種は原本を異にしている。

『サンスクリットによる法華經』では、研究者が原典として使うテキストにおいて、最も一般的なケルン・南条校訂本(略号SPS)を用い、『漢訳法華經』は、現存する中で最も一般的に用いられている鳩摩羅什訳の『妙法蓮華經』(略号SPC2)を用いて研究を進めた。『チベット訳法華經』に関しては、本研究を行う段階では文法知識が不十分であったため、今後の課題とした⁹。

4、研究の方法と資料

本研究の工程としては、工程を二つに分けてすすめた。「SPC2を基にしてSPSを対応させる作業」を工程Aとし、「SPSを基にしてSPC2を対応させる作業」を工程Bとした。

この二つの工程の中で、SPC2・SPSの中に含まれる「読誦」という内容をすべて抜粋し、SPSとSPC2対応させながら「読誦」を網羅的に調査した。

4-1 工程Aについて

SPC2には、単体の「読」という表記が13か所、単体の「誦」という表記が12か所、「読誦」という表記が60箇所存在しており、合計で85箇所が調査対象となった¹⁰。

資料3は、工程Aの36番目の資料であり、SPC2の従地涌出品の一説である。資料3の3行目に出てくる「読誦」という単語が、9行目に記したSPSの「svādhyāya」に対応することを資料は表している。資料には、それぞれの訳文と出典箇所を示しており、この作業を85箇所全てで行ったのが工程Aの作業である。

インド、中国、チベットの仏教にも精通されている鈴木教授の研究を受けて、何を研究するにしても、一つの対象、一つの方向だけをみていくのではなく、一旦は広い思想史の中に対象を連れ出すことで、初めて真の姿に近づくことができることを知った。

広い思想史の中から僧侶としての自分をみたときに、自分はどのように映るのだろうか。日蓮宗は、日本仏教はどのような姿をしているのか。日蓮宗の僧侶が持つ役割には、どのような意味があり、広く仏教徒としての営みの範疇に入っているのであろうか、という疑問が生じ、自らを見つめ直す必要性に迫られた。

本研究は、今まで疑問を抱くことなく行ってきた読経を、一度広い思想史の中に連れ出した時にどのような姿をしているのかという疑問と向かい合うことを目的とする。

3、テキストの説明⁸

資料1で示しているように、本研究における『法華経』とは、『サンスクリットによる法華経』・『チベット訳法華経』・『漢訳法華経』の総称である。『漢訳法華経』には6種類が存在していたが、現存するのは『正法華経』（竺法護訳）・

資料1 『法華経』と『妙法蓮華経』の関係

『法華経』

- 『サンスクリットによる法華経』
- 『チベット訳法華経』
- 『漢訳法華経』
 - ・ 『正法華経』（竺法護訳）
 - ・ 『妙法蓮華経』（鳩摩羅什訳）
 - ・ 『添品妙法蓮華経』（闍那崛多訳）

典は、日蓮宗での教学を理解する上で依拠すべき事典の一つであり、読誦に関して次のような記述が見られる。

- ・ 仏教各派すべて誦経を信行形式の第一とする。
- ・ 日蓮聖人は昼夜に読誦されており、読誦は滅後の教団でも重要な課題であった。
- ・ 功德の増大は、法華経読誦の巻数による。
- ・ 加行所清規には毎日の読誦巻数が定められ、修法の現証は経力によって顕れる。

(日蓮宗事典刊行委員会 [1981] 925-926 誦経の功德²を参照した。)

ここから、‘読経することで功德が生まれ、また読経する量が増えれば増えるほどその功德は増大する’という考えがあることが確認される。

発表者は日蓮宗大荒行堂を二度³成満させて頂いた。大荒行堂では、一日のほとんどを読経に費やし、より多く読誦するために、より速く読誦するという方法が用いられていた。そこからも読経を重んじていることが窺えた。これらのことを通して、発表者にも‘読経することで功德が生まれ、また読経する量が増えれば増えるほどその功德は増大する’という認識が自然と形成されている。しかし、発表者の読経に対するこの認識は本当に正しいのであろうか。

発表者は山口県立大学大学院に入学し、鈴木隆泰教授の研究⁴を学ぶことで、仏教に対する認識が大きく変わり、自分が僧侶でありながら、いかに仏教のことを理解していなかったかを思い知るに至った。例えば、日蓮宗の僧侶である発表者にとって儀礼を行うことは大切な勤めであるが、インドでは僧侶が在家者の通過儀礼⁵に携わることはない⁶。また僧侶の出家ということにも大きな違いがみられる⁷。そのことから、インドと日本では仏教の姿が大きく異なっていることが看取できる。